

ヴェルナー・ゾンバルト研究の動向

——過去 20 年の研究状況——

奥 山 誠

I はじめに

本稿は、1990年代以降のヴェルナー・ゾンバルトの経済思想にかんするドイツと日本の研究状況を概観するものである。いうまでもなく、ゾンバルトは、マックス・ヴェーバーとならんで「歴史学派の新世代」（「最新歴史学派」）を代表する経済学者の1人として知られ、新世代の「資本主義」パラダイムの創始者として重要な位置づけを与えられる一方、近代資本主義研究を中心とする彼の学問的遺産は、今日なお経済思想史の領域において注目的であり続けている（田村 2009）。

しかし、ゾンバルトの人物と学問に対するこれまでのアカデミズムの評価は、必ずしもポジティブなものではなく、それどころか「彼〔ゾンバルト〕の著作は、しばしば軽視され、批判され、拒絶された」（Peukert 2000, 16. [] の補足は引用者、以下同様）のが実情であった。ポイカートは、その原因を（1）ゾンバルトの思想的立場の変化、わけでも「〔19〕世紀末に社会主義的改革論者から超保守的な文化批判者へと変節したと誤解されたこと」、（2）資本主義成立のテーゼをめぐる新しい仮説を矢継ぎ早に提起したためにそれがヴェーバーの議論と比較して「学問的厳密性の欠如」と見なされた

こと、さらには「躓きの本質的なポイント」として（3）一時的とはいえ、ナチスを支援したこと、に求めている（Peukert 2000, 16）。

なるほどポイカートの指摘は、ドイツ（および日本）においてしばしばゾンバルトに対して向けられてきた従来のネガティブな評価を的確に集約・整理するものであり、上記3点をもってゾンバルトが「軽視」・「批判」・「拒絶」された理由とするのは当を得ている。しかし、こうした傾向が継続されたのは、せいぜい第2次大戦以降 1980年代までの時期に限るということに注意しなければならない。ドイツ本国では、90年代以降ゾンバルト再評価の気運が高まりを見せており、特にゾンバルト没後50年の節目に開催された国際シンポジウム（1991年7月、ハイルブロン）を契機として、それまでの閉塞を打破するかのようゾンバルトにかんする本格的なモノグラフが相次いで公刊され、あたかも経済思想史における「ゾンバルト・ルネサンス」といっても過言ではない研究状況が導かれた。

もとより、こうした動きはただゾンバルト1人に限定的に生じたのではなく、その背景には、1980年代の「ドイツ歴史学派ルネサンス」がある。池田幸弘は、80年代以降歴史学派に対する関心が高まった理由として、（1）ナチスの悪夢

ゆえにドイツの経済思想すべてが拒絶された時期を経て、経済学へのドイツ独自の貢献のルーツを解明しようとする若い世代がほかならぬドイツで成熟・台頭し始めたこと、(2) 形式的理論を過度に重視し、現実世界から遊離する新古典派経済学への不満から「異端の経済学」としてのドイツ歴史学派の方法論が改めて注目されるようになったこと、を挙げているが (Ikeda 2008, 80), 90年代以降のゾンバルト研究の隆盛は、まさに彼の師シュモラーをはじめとするドイツ歴史学派全体の復興と連動して生じた現象として捉えられなければならないのである¹⁾。

以上の問題認識にもとづいて、本稿では、国際シンポジウム開催以降の過去20年間(1992年から2012年まで)のドイツと日本におけるゾンバルト研究の動向を精査する。まずドイツで発表されたこの時期を代表する単著の業績として、アッペル (Appel 1992) とレンガー (Lenger 1994) を取り上げ、併せてブロッケの論稿 (Brocke 1992) にも注目したうえで、それぞれのアプローチの仕方と特徴について摘記する。この3点は、ゾンバルトの経済思想を再評価する先駆的な試みであり、その後のゾンバルト研究の礎石となったという意味でも決定的に重要である。くわえて、国際シンポジウムの成果であるバックハウス編纂の論集 (Backhaus 1996abc) のなかからゾンバルトの経済学・経済思想を扱った論文を選別し、その内容を紹介するとともに、2000年以降に刊行された著作では竹林 (Takebayashi 2003) を重視し、その考察がもつ意義に触れる。次に、日本の研究を整理・概観する。ドイツでの体系的かつ重厚な成果に比較すると、日本ではまだゾンバルトにかんする本格的な単著もなく、研究の遅れは否定できない。しかし、この時期にはドイツでの研究の興隆に刺激を受けながら、田村 (1996; 1997; 1998), 柳澤 (1998; 2001), 牧野 (2003) を始めとして、近年では若手の研究者たちからも注目すべき論稿が発表されており、研究状況

はけっして停滞してはいない。個別のテーマによっては本国をも凌ぐ独創的かつ優れたゾンバルト論が提出されていることが、ここで確認されよう。最後に、本論で得た成果を総括し、今後のゾンバルト研究の展望を探る。

II 海外 (特にドイツ) の研究動向

ドイツ本国における1990年代以降の重要な研究としてまず第1に挙げられるのは、ミヒャエル・アッペルがミュンヘン大学に提出した学位論文を公刊した著作『ヴェルナー・ゾンバルト—近代資本主義の理論家・歴史家』(Appel 1992)である。本書は、しばしばゾンバルトの代表作と目される『近代資本主義』第2版([1916] 1987ab-1927a)のみならず、それに先立つ初版(1902ab)までも射程に入れたうえで彼の資本主義論の展開過程を追跡した初めての本格的な著作である。ゾンバルトのテキストそれ自体の内在的考察は総じて簡潔な整理にとどまっているものの、本書の最大の貢献として評価されるのは、『近代資本主義』に対する同時代のアカデミズムの反応を精力的に掘り起こしていることである。たとえば、初版がペロウやデルブリュックといった専門の歴史家からその手工業把握や資本成立の理論(=「地代蓄積説」)をめぐって厳しい批判にさらされたこと、また第2版もドブシュから「経済システム」という理論的枠組みによって歴史的諸事実を整理しようとするその手法が指弾されたことなど、当時の有力な学者たちからの批判に着目することで『近代資本主義』をめぐるとの主要な論争点を浮き彫りにしている。アッペルのこの著作によって、『近代資本主義』が出版と同時にドイツだけではなく、同時代の世界中の経済学者および中世史家をはじめとする歴史学者によって大きな関心をもって迎え入れられていたという事実が立証された。くわえて、『近代資本主義』初版の刊行以来、「資本主義」という用語が人口に膾炙し、学術文献のなかでも頻繁に用いら

れるようになったという同時代人パッソウの証言 (Passow 1918, 2-3) も本書によって初めて具体的に裏づけられたとあってよい。

アップルの著作と同年に発表されたベルンハルト・フォン・ブロッケの長大な論稿「ヴェルナー・ゾンバルト (1863-1941) — 資本主義・社会主義・彼の生涯、著作と 50 年来の影響」(Brocke 1992) は、ブロッケ自ら編集を手がけた『近代資本主義』にかんする研究書 (Brocke 1987a)²⁾ に収められた独語論文 (Brocke 1987b)、さらに遡れば 70 年代初頭に公にされたゾンバルト研究 (Brocke 1972) を大幅に修正・拡充したうえで英語に書き改めたものである。ゾンバルトの家系・生涯を精査し、主要テキストの再検討とその資本主義理論の現代的影響までを考証した本論文は、英語で執筆されたゾンバルトのモノグラフとしては今日なお最重要の成果の 1 つに数えられるものである。ブロッケの多岐にわたる鋭い分析のなかでも特に注目されるのは、マルクスとゾンバルトとの資本主義に対する分析視角の相違を剔出した点にあらう。ブロッケは、ゾンバルトの「近代資本主義」論がマルクスからの決定的な影響のもとに彫琢された議論であることを認めつつも、マルクスにとっての「歴史分析の主体」が「超人間的な主体」としての「資本」であるのに対して、ゾンバルトにとってのそれは、シュンペーターと同じく、「近代的企業家」にほかならないことに注意を喚起する。ゾンバルトは、本質的には「企業家の歴史」、さらにいえば企業家に宿る「資本主義的精神の歴史」を重視しており、この「資本主義的精神」という概念を用いることでゾンバルトは、資本主義を年代順に世界史のなかに配列し、かつヨーロッパにおける経済発展を内的に区分するための基準を獲得した、とブロッケは指摘する (Brocke 1992, 147-50)。ブロッケは、このように資本主義の分析に「精神的な解釈」を導入したところにマルクスとは異なるゾンバルト独特の特徴を見出そうとしている。

フリードリヒ・レンガーの『ヴェルナー・ゾンバルト 1863-1941—一つの伝記』(Lenger 1994) は、従来のゾンバルト研究の水準を飛躍的に高める大作である。この著作は、ゾンバルトの生誕から正教授就任までを扱った第 1 部と、それ以降ベルリン大学正教授としてワイマール時代からナチスによる政権掌握という激動の時代を生き、第 2 次大戦中に病没するまでを扱った第 2 部から成っており、全 15 章 570 ページもある浩瀚な伝記である。レンガーは、公刊史料のみならず、メルゼブルク公文書館所蔵のゾンバルトの遺稿をはじめとして、そのほか同時代人の残した膨大な未公刊史料をも渉猟しつつ、ゾンバルトの生涯を丹念に追っている。本書によって明らかにされた新事実やユニークなエピソードは数多いが、看過しえないのは、本書が単に伝記的側面だけではなく、ゾンバルトの資本主義理論の分析にかんしても光彩を放っているということである。特に、ゾンバルトのユダヤ人論・ユダヤの資本主義論を扱った第 9 章では、『ユダヤ人と経済生活』(1911a) に対するほかに類を見ないほどの詳細な検討が行われていると同時に、この作品が第 1 次大戦以前のドイツ社会学における人種問題への関心の高まりとも相俟って、刊行されるやいなや夥しい反響を巻き起こしたことなどが指摘されている。処女作『ローマ・カンパーニャ』(1888) から晩年の『ドイツ社会主義』(1934) にいたるまでレンガーの分析は、ゾンバルトの主要著作・論文のほとんどすべてに及んでおり、しかもその考察の水準は高く、彼の著作は今日のゾンバルト研究におけるスタンダード・ワークとして不動の地位を確立している。

アップル、ブロッケ、レンガーの業績は、上に見たようにそれぞれの観点・分析視角から従来のゾンバルト研究に新しい知見をくわえようとする意欲的な試みといえるが、この 3 者が共通して特に関心を寄せているのが、リンデンラウプの業績 (Lindenlaub 1967) を契機とするゾ

ンバルトの「転向」問題である。かつてリンデンラウプは、『近代資本主義』の初版と第2版の間にゾンバルトの世界観や人生観、さらには学問的な立場に根本的な変化が生じていると指摘し、その思想上における転換・転向の問題に注目した。リンデンラウプによれば、マルクス主義からの強い影響下にあった初期のゾンバルトは、『19世紀のドイツ国民経済』（1903）以降、次第に「反唯物論、反政治、反民主主義」的な立場を濃厚にしつつ「貴族的な転向 aristokratische Wende」を遂げていったというのである。ゾンバルトにおけるマルクス主義の受容とそこからの離反という問題は、彼の資本主義観の変遷・変容を考察するうえでもきわめて重要であるが、90年代以降の卓抜なゾンバルト研究が止目するのまさしくこの論点であった。まずアッペルは、「1902年以降、ゾンバルトはますますマルクスから離れていった」と述べたうえで、リンデンラウプと同じく、『19世紀のドイツ国民経済』において「ゾンバルトの世界像と彼の思想の悲観主義的傾向が明瞭になった」と指摘する（Appel 1992, 49）。他方、ブロッケも同様の見解を主張しながらも、1904年に開催されたセントルイスでの芸術・科学国際会議（International Congress of Arts and Science）への参加、その際、「新世界」アメリカの資本主義に直に接したことが、ゾンバルトの転向プロセスにとって「必須の体験」となったことに注意を喚起する（Brocke 1992, 145）。また、レンガーは、資本主義を「民族的生活形態の終焉」ないし「文化の墓場」として捉えるゾンバルトの姿勢は、1900年にははっきりと表明されていたと指摘している（Lenger 1994, 137）。つまり、『近代資本主義』初版刊行以前にゾンバルトの資本主義批判の萌芽を認めるのがレンガーの立場である。「転向」問題をめぐっては、これ以降も論者の関心を引いたが（Tötto 1996）、今日なおゾンバルト研究におけるホット・イシューであり続けている。

上記3点の代表的な成果を受けて、1996年にはユルゲン・バックハウス編纂の全3巻からなる研究論集『ヴェルナー・ゾンバルト（1863-1941）—社会学者』（Backhaus, ed. 1996abc）が公刊された。この論集は、バックハウスをオーガナイザーとして1991年7月にハイルブロンで開催された国際シンポジウムの成果をまとめたものである。全3巻に収められた総計34本の論文はすべて英語であり、その第1巻の巻頭には、先に紹介したブロッケの論文が若干の修正を経たうえで再掲された（Brocke 1996）。全3巻を通じて扱われる主なテーマは、伝記的なアプローチ（Müller 1996; Backhaus 1996d）はもちろんのこと、たとえば、政治論（Scaff 1996）、ユダヤ人論（Ludwig 1996）、戦争論（Wright 1996）、経済学方法論（Seifert 1996）、人口論（Schmidt 1996）、都市論（Betz 1996a）、手工業論（Lenger 1996）、社会主義論（Glombowski 1996）など多岐にわたっており、実に多様な観点からゾンバルトの人物とその思想、および彼の経済学が描き出されている。紙幅の都合上すべての論文に言及することはできないので、ここでは特に経済学ないし経済思想の分野に関連する注目すべき成果³⁾と、ゾンバルトとナチスとの関係を扱った論稿に限定してその内容を紹介する。

まず、ゾンバルト経済学の基本的特徴を掴むうえで有益なのが、ハーゲマンとランデスマンの研究である。彼らは、ゾンバルトの資本主義論の核心が「静態」ではなく「動態」にあると力説し、特に「盛期資本主義 Hochkapitalismus」の展開において企業家活動の興隆と近代的銀行制度の創設が重視されていることに注目する。ゾンバルトにとっては「金融活動と産業活動との結合」が経済発展を推し進めるための原動力であり、わけても銀行による信用創造は企業家活動の夥しい増加を誘発するとともに、企業家精神の絶え間ない再生を促す源泉となった（Hagemann and Landesmann 1996, 188）。ゾンバ

ルト経済学の動態性については、同時代にシュンペーターの指摘があるが (Schumpeter 1908, 18 / 訳 66), ハーゲマンとランデスマンはその具体的内容を示すことに成功している。

プリシングの論稿「企業家と企業家精神」(Prisching 1996) は、ゾンバルトの企業家論を正面から扱った力作である。ゾンバルトの重視する経済主体は「資本主義的精神」の担い手としての企業家であり、その意味でプリシングのテーマ設定は当を得ている。ただし、その分析は近代的企業家層の歴史的な生誕にかんするゾンバルトの議論の紹介にウエートが置かれており、それゆえ現実の企業家を彼がいかに捉えていたのかについての考察は必ずしも十分ではない。また、ゾンバルト初期の代表作『近代資本主義』初版、さらには彼の企業家観を論じるうえで不可欠の論文「資本主義的企業家」(1909) がまったく検討されておらず、プリシングの研究にはテキスト選定上の不備があることを指摘せざるをえない。

「盛期資本主義」以降のゾンバルト晩期の経済思想に関心を寄せるのは、チャロウベック (Chaloupek 1996) とプリッダート (Priddat 1996) である。チャロウベックは、「盛期資本主義」を分析対象に据えた『近代資本主義』第 2 版第 3 巻の刊行年 (1927) が、ゾンバルトの「経済時代」の区分では「晩期資本主義 Spätkapitalismus」の時代にあたることに注目し、資本主義の構造および制度の形態転化の問題が実は第 3 巻の主要テーマの 1 つであることを強調する。社会政策学会での報告「資本主義の転換」(1929a) や『資本主義の将来』(1932) に拠りながら、チャロウベックはゾンバルトの「晩期資本主義」論の中核をなすテーマ、すなわちアウトタルキー化や再農業化、あるいは景気循環の縮小の問題などについて詳述している。なお、チャロウベックには、ゾンバルトとシュンペーターの晩期の経済思想を比較検討した興味深い論稿 (Chaloupek 1995) もある。対して、プリッ

ダートは、世界恐慌以降深刻化した失業問題に対するゾンバルトの実践的な政策提言について要約している。プリッダートによれば、世界恐慌は、ゾンバルトにとって「内生的な資本主義の危機」ではなく、「第 1 次大戦が創り出した外生的な販路の危機」であり、就中シンジケートと労働組合による市場を無視した価格・賃金統制は、かつてない財・労働需要の下落を出来し、夥しい非自発的失業 (者) を生み出した。大戦以降の国家予算の縮減という状況下でかかる問題を克服するためにゾンバルトは、一方では政府の財政政策による追加的購買力の創出と、他方では金融政策、つまり中央銀行の信用創造による無利子での企業への貨幣貸付を提言する。ただし、後者の信用拡大は過度なインフレを抑制するためにも「生産目的 productive Zwecke」のために用いられなければならないという立場をゾンバルトは堅持した (Priddat, 1996, 272-73)。従来、世界恐慌期におけるゾンバルトの経済政策論に照射した研究は乏しく、プリッダートの成果は貴重である。

さらに、ゾンバルト晩年の思想とナチスとの距離という重要な問題に鋤を入れた研究としては、レハイス (Reheis 1996) とリース (Rieß 1996) がある。レハイスは、若きゾンバルトのラサールへの熱烈な傾倒を指摘したうえで、1880 年代にはすでに社会主義と国家主義との結合をゾンバルトが強く望んでいたと主張する。『19 世紀における社会主義と社会運動』初版 (1896) は、マルクス主義の「明確な修正」(Reheis 1996, 176) であり、事実そこでは階級闘争理論が否定され、政治・経済的な諸改革の断行にあたって国家が果たす役割の重要性が力説される。かくて、『ドイツ社会主義』において個人ではなく国家が「中心的な概念へと昇格された」(Reheis 1996, 178) のは、ナチスへの接近ではなく、むしろゾンバルト自身の思想の一貫性を示していた。レハイスは、ゾンバルトがナチス的な人種理論を徹底して拒絶したこ

と、さらには彼が「あらゆる民族が神の前では平等」という信念のもと民族の多元的な共存を強く訴えたことなどを例に挙げて、ゾンバルトとナチスとの断絶面を強調する。とはいえ、レハイスは少なくともこの論稿ではゾンバルトを免責してはいない。結論で彼はいう。「保守革命の多くの主導者の1人として、彼 [=ゾンバルト] はドイツ・ファシズムとその犯罪に対する責任を実際分かち合わなければならなかった」(Reheis 1996, 186)。レハイスとは異なり、ゾンバルトとナチスとの親近性を重視するのがリースである。先行研究を批判的に検証しつつリースは、ゾンバルトがフリックやゲッペルスといったナチスの要人たちと親密な交際をもっていた事実に注目する。たしかにゾンバルトは急進的な反ユダヤ主義には与さず、そのためナチス首脳部の人種政策局と衝突したが、そうした批判的姿勢よりも「[ナチスへの] 忠誠の発言のほうがよくいっそう明白」(Rieß 1996, 202)であった。リースは、その根拠としてエルムスレーベンの名誉市民に選出された際にゾンバルトが「アドルフ・ヒトラーの共闘者」と自己紹介したことや民主主義的な法規範を廃棄するためのナチス直属の組織である「ドイツ法律アカデミー Akademie für Deutsches Recht」にゾンバルトが積極的に協力した事実などを挙げている。こうして、リースは「ゾンバルトの思想のなかには[ナチスへの]断絶よりもむしろ連続性がある」(Rieß 1996, 203)と結論づけるのである。

バックハウス編纂の論集には、上記の論稿以外にもゾンバルトとドイツ・ロマン主義との関係を扱った Betz (1996b)、トーマス・マンをケース・スタディとしてドイツ文学に及ぼしたゾンバルトの影響を考察した Marcus (1996)、英語圏におけるゾンバルト経済思想の受容を詳細に論じた Senn (1996)、などがある。なお、その後バックハウスの編纂によって独語論文からなる研究論集『ヴェルナー・ゾンバルト (1863-

1941)—社会科学の巨匠』(Backhaus, hrsg. 2000)が刊行された。本論集はゾンバルトの経済思想を総括的に検討した Peukert (2000) を巻頭論文に据え、ゾンバルトの社会学理論に注目した Drechsler (2000)、国家と経済との関係にかんするゾンバルトの議論を批判的に分析した Kurer (2000) などを収録しているが、他にも先の英語論文の修正・独訳版として Prisching (2000)、Lenger (2000)、Schmidt (2000)、Betz (2000)、Reheis (2000) が寄稿されている。

世紀転換以降のドイツ本国におけるゾンバルト研究として特筆に価するのは、ビーレフェルト大学に提出された学位論文を公刊した竹林史郎の著作『ドイツ社会学の形成段階における資本主義理論の生成』(Takebayashi 2003)である⁴⁾。竹林は、本書で膨大な一次資料を綿密に解説することによってドイツ歴史学派生成期の学問的状况を再構築しているが、ゾンバルトにかんする分析でも従来注目されてこなかった重要な論点を析出している (Teil 2, VII)。まず、ゾンバルトの「近代資本主義」論の前提としてマルクス、アルフォンス・トゥーン以来の議論を継承した彼の家内工業研究 (1891; 1892; 1893) の意義が強調される。ゾンバルトにとって家内工業の歴史的成立は、「資本主義的生産様式」および「近代資本主義的階級形成」の萌芽として捉えられたのであり、それゆえ「家内工業の歴史」を探究することは、「資本主義の歴史」を考察することと無関係ではありえず、否それどころか家内工業研究の延長上に『近代資本主義』初版が著されたことがはっきりと指摘される。次に、初版における「手工業」と「資本主義」の概念規定にマルクス『資本論』第1巻からの強い影響が窺われること、ゾンバルトの「資本主義的精神」は、ブレンターノとシュモラーの「商業精神」をベースとして彫琢された概念であること、さらにゾンバルトの中世商業観は、ペロウの研究成果に多くを負っていたことなど、豊富な関連文献の解析によって新事実が

次々と明らかにされる。こうして、竹林は、初期ゾンバルトの家内工業観から資本主義研究へといたる学問的営為の過程を、マルクス、エンゲルスとの継承関係をも視野に収めつつ再構成することに成功しており、堅実な文献考証に裏打ちされたその卓抜な成果は、レンガーの伝記研究と双璧をなすものとして高く評価されなければならない。

この時期における竹林以外の注目すべき業績としては、ゾンバルトの資本主義理論に関連する論文を中心として編まれた選集『ヴェルナー・ゾンバルト—資本主義理論としての国民経済学』（Ebner und Peukert, hrsg. 2002）と、ゾンバルトの経済思想がロシアに及ぼしたインパクトを仔細に追った『ロシアにおけるヴェルナー・ゾンバルト』（Zweynert und Riniker 2004）がある。前者は、論文8本と著書2冊を収めており⁵⁾、編者エプナーとポイカートによる解説が付されている（Ebner 2002; Peukert 2002）。後者は、「1897年から1933年にかけて、…、ヴェルナー・ゾンバルトはロシアでその著作が最もよく読まれた外国人学者であった」（19）という事実を実証的に裏づけようとする。1900-31年の間に計77冊のゾンバルトの著作のロシア語訳が出版され（45）、また1914年のゾンバルトのロシアでの講演は、「第一級の社会的事件」（74）として大きな反響を呼び、数多の著名人がつめかけたという。本書には付録として新聞に掲載されたゾンバルトのロシア見聞記と彼がロシアで受けたインタビューも収められている。さらに、レンガーの『1900年頃の社会科学—ヴェルナー・ゾンバルトと彼の同時代人たちにかんする研究』（Lenger 2009）も近年における重要な成果である。本書は、主に伝記出版以降にレンガーが発表した10本の論文からなっており、その副題が示すように、ゾンバルトとシュモラー、テンニース、ジンメル、ヴェーバー、シェラー、ミヘルスなど多彩な同時代知識人たちとの学問的交流を描いている。

III わが国の研究動向

上に見た90年代以降のドイツ本国におけるゾンバルト研究の興隆は、わが国にも大きな刺激を与え、第2次大戦以降、久しく顧みられなかったゾンバルトに再び強い関心が集まる契機となった。従来、わが国のゾンバルト研究は、特にマックス・ヴェーバーとの資本主義起源論争に焦点を合わせたうえで、ゾンバルトをその敗北者として、すなわち「西欧近代」に特有の資本主義像を見誤った経済史家として位置づけるのが通例であった。しかし、80年代におけるドイツ歴史学派再評価の動きと連動したゾンバルトへの関心の高まり、すでに確認した「ゾンバルト・ルネサンス」とも形容しうるドイツ本国での多様かつ豊饒なゾンバルト論の出現は、わが国におけるそうした一面的なゾンバルト評価を修正し、ゾンバルトの議論の可能性を探求する新しい研究潮流を生み出していく⁶⁾。

田村信一の論稿「近代資本主義論の生成(一)・(二)—ゾンバルト『近代資本主義』（初版1902）の意義について」（田村1996; 1997）は、まさにこうした研究の嚆矢である。田村は、アッペル、ブロッケ、レンガーらの先行研究に学んだうえで、これまでわが国ではまったく顧みられなかった『近代資本主義』初版を詳細に検討し、その意義を明らかにするとともに、初版と改訂された第2版との相違点をも浮き彫りにした。田村によれば、初版と第2版との「最大の相違」は、「初期資本主義観が180度転換したこと」にある。すなわち、初版では「妨害」要因として把握された「初期資本主義の発展に対する国家の政策的意義」が、第2版では「大経営成立の促進要因として決定的に重視され」（1997, 243注2）。田村も指摘するように、こうした初期資本主義観の転換は、「近代資本主義の発展史にかんする研究」という副題の付された『奢侈と資本主義』（1913a）と『戦争と資本主義』（1913b）にも確認されるものであり、

これ以降、国家の諸活動が果たす役割は、ゾンバルトにおける「近代資本主義」生成の議論で中心的な位置を占めるようになった。田村は、さらに「転向」問題の重要性にも留意したうえで、「資本主義の推進」を主張した初版でのゾンバルトが、第2版では「資本主義のもたらす大衆社会状況に対して政治的・文化的アパシーを強めつつ、ロマン主義的立場を濃厚にし、マルクス主義の影響を払拭しながら歴史学派の本流に回帰していく」（田村 1996, 2）と的確に指摘している。なお、田村はゾンバルトに対する「マルクス主義の影響」にかんして「搾取論・窮乏化論の拒否」が明瞭であることからその内実は「換骨奪胎」されていると主張している（田村 1996, 6; 1997, 242）。『資本論』第3巻の書評論文（1894）の考察を通じて導かれたこの結論は斬新であり、従来の研究史に修正を迫る重要な指摘であるといえる。以上にくわえて田村は、わが国のゾンバルト研究の動向に大きな影響を及ぼした大塚久雄の研究を批判的に摂取・分析したうえで、ヴェーバーの「先行者」としてのゾンバルトの「資本主義的精神」論がもつ意義を明確に強調している（田村 1996, 26 注7）。

田村の貢献としてもう1つ看過しえないのは、ドイツ本国でもほとんど取り上げられることのない初版第2巻を正面から考察し、その主要テーマである「資本主義発展の理論」について綿密な考証を行っていることである（田村 1997, 224-40）。2巻総計 1,300 ページ以上にも及ぶ初版を精読し、初期ゾンバルトの資本主義論の全容を解明した田村の功績は、その後のわが国におけるゾンバルト研究の礎石を築いたという意味でもきわめて大きいものがある。田村は、その後、ロッシャー、シュモラー、ゾンバルトという3世代の線上でドイツ歴史学派の展開過程を捉えた力作（田村 1998）を発表する一方、シュモラーとゾンバルトの思想的継承関係を具体的に示した英文の業績（Tamura 2001）をも公にしている。かくして、戦後長らく停滞

していた日本のゾンバルト研究は、田村の築いた成果を通じて著しい前進を示すこととなった。

田村の研究に刺激を受けつつ、『近代資本主義』初版に精緻な分析を企てたのが牧野雅彦である。牧野の『歴史主義の再建』（牧野 2003）⁷⁾は、ヴェーバーをめぐる同時代の社会・経済思想を探究した著作であるが、その第5章では近代資本主義の成立にかんするゾンバルトの解釈とそれに対するペロウの批判、さらにはこの両者にヴェーバーがいかに対応したのかが論理的に解説されている。牧野は、ゾンバルトとペロウの議論をそれぞれ整理したうえで、「倫理」原論文（1904-05）における「ヴェーバーの課題」について次のようにいう。「資本主義の成立に大規模な貨幣資産の蓄積は必ずしも必要ではないというペロウの問題提起を受けて、小市民層を中心とした産業的中産身分のうちから資本主義的経営が成立してくる、その具体的歴史的な因果関連を分析すること、しかもその際には他方で、資本主義の精神的起動力はなにかというゾンバルトの問題提起をもあわせて受けとめること、これが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』におけるヴェーバーの課題であった」（牧野 2003, 148）。牧野のこの指摘は、ヴェーバーによる「倫理」改訂（1920）以降、甚だ見通しづらくなった「ゾンバルトからペロウを経てヴェーバーへ」という論点の継承関係を明確に示しており、興味深い。

ドイツ本国の成果および田村の研究を意識しながらも、歴史学の分野からゾンバルトへの接近を試みるのは、村上宏昭の一連の論稿（村上 2003; 2004; 2006a; 2006b）である。まず、村上（2003）では、ゾンバルトの人種理論（＝ユダヤ人論）がアカデミズムのなかで「非科学的」かつ「イデオロギー的」な議論として断罪され、人種モデルの「ネガティブ・パラダイム」の典型例として周知されるにいたった経緯が描かれる。次に、村上（2004）では、ヴェーバーの「価値関係」的な理念型と比較しつつ、それと対照

的な「全体像」を志向するゾンバルトの「価値内在」的な方法論が追究される。さらに、村上(2006a)では、ゾンバルトの手工業と資本主義の区別の基底に「具体(個性)」対「抽象(非個性)」という二項対立図式があることを説いたうえで、ゾンバルトの掲げるユダヤ人像が前者から後者へと移行する過程が浮き彫りにされた。村上(2006b)の課題は、ゾンバルトの資本主義把握の指標である「具体/抽象」図式にマルクスからの少なからぬ影響があることを示すことにある。村上の分析視角には、経済学ブローパーではないがゆえのユニークさがあり、その考察は経済学史・思想史の枠組みを超えた新しいゾンバルト研究の展開として注目に値する。なお、村上はその後、ゾンバルトの悪名高い戦争パンフレット『商人と英雄』(1915)を検討した(村上2009)。そこでは、戦争=軍国主義と教養理念とを不可分の統一体と見たゾンバルトが第一次大戦を過去のドイツの「英雄精神」の再燃、ないし「停滞の澁みの中にあるドイツ政治を蘇生させる教養理念の一つの発現形態」(村上2009, 66)と捉える一方、大戦に「商業・貨幣戦争」という狭い意味づけしか認めないイギリスの「商人精神」に対しては峻烈な批判へと向かうその独特の論理が、当時のドイツ教養人の戦争観をも踏まえながら冷静に解明されている。

奥山誠は、論文「ヴェルナー・ゾンバルトの企業家論」(奥山2005)で「指導的経済主体」としての企業家をゾンバルト経済学の中核に据える視点を打ち出し、併せて「証券原理」を軸とする彼の信用理論をも検討することによって、シュンペーター以来、近年ではハーゲマンとランデスマンが強調したゾンバルトの動的な経済発展理論の特徴をスケッチした。本論文では「企業家」と「商人」からなるゾンバルトの資本主義的企業家の機能的特質について考察するとともに、それがシュンペーターの革新的な企業家像にも一定の影響を及ぼしていた事実

を指摘している。続く奥山(2006)では、「資本主義的企業家」(1909)と『ユダヤ人と経済生活』(1911a)との継承性に注目し、ゾンバルトの提示する企業家と「ユダヤ人的特性」との親和関係を別出した。さらに、奥山(2008a)では、経済発展の原動力として銀行の信用創造を重視するゾンバルトの信用理論がマクラウドを起点とし、シュンペーターとハーンによって展開された「動的信用理論」から受けた影響について論証している。また奥山(2008b)では、ゾンバルトの株式会社支配論をヒルファディングの「大株主支配の論理」と比較・分析したうえで、その特徴を「経営者支配の論理」に見出した。以上の成果を基礎として、奥山はゾンバルトの「盛期資本主義」に対する認識を企業家、信用、株式会社という3つの観点から解明しようとする試みを学位論文としてまとめている(奥山2009)。その後、奥山は、明治から第2次大戦にいたるまでの時期の日本におけるゾンバルト経済思想の受容過程について精査した(奥山2010)。ここでは、福田徳三、坂西由蔵、大西猪之介、本位田祥男、梶山力のゾンバルト受容を取り上げている。なお、同論文での福田のゾンバルト受容を敷衍したものが、奥山(2011)である。恩師ブレンターノとならべてゾンバルトを高く評価する福田は、『近代資本主義』初版を刊行と同時に読み込み、これを絶賛したうえで、いまだ「大福帳的の幼稚な小売根性」から脱却していない明治末葉の日本の企業家たちに対して、ゾンバルトのいう「資本主義精神」(福田の言葉では「企業精神」)を早急に備えるよう努力すべきであると力説した。大正期には、大塚金之助をはじめ多くの日本の俊秀たちがゾンバルトの警咳に接することを求めてベルリン大学に留学したが、その起点は福田によるゾンバルトの導入・受容にあったといつてよい。

さて、ゾンバルト晩年の思想とナチスとの関係を再考しようとするレハイスやリースの試み

は、この問題にかんするわが国の研究をも深化させた。「保守革命」という観点からこの問題の核心に迫るのが、恒木健太郎の論稿（恒木2010）である。恒木は、周到な先行研究の渉猟にもとづいて、「ゾンバルト＝ナチのイデオログ」という単純な理解がもはや成り立たないこと、むしろ双方の思想の対立点、ゾンバルトのナチス批判にこそ目を向けなければならないことを強調する一方、さりとしてこれによってゾンバルトがナチスに影響力を行使しようとしていた事実、あるいはゾンバルトの思想の「ナチス的な性格」という側面を看過・隠蔽してはならないことに注意を喚起する。恒木は、『ドイツ社会主義』における「経済の時代」批判にまず注目し、この時代〔＝現代〕の人間が、魂のない「精神化」、労働過程から排除された「事物化」ないし生活形態のすべてが一様に統一される「均一化」によって支配されているとするゾンバルトの認識を紹介する。かかる時代を生きる近代的経済人は、「量」・「速さ」・「新しさ」・「権力」のみを信奉し、その精神は荒廃して今や崩壊寸前にまで追い詰められつつある。かくて彼らの人間性を回復する唯一の道は、「経済の時代からの全面的な転向」＝「ドイツ社会主義」の建設を措いてほかにはない。では、「ドイツ社会主義」とはなにか。それは、「資本主義的精神」によって廃絶されたと考えられた農民・手工業者を代表とする「自然な人間」の「精神」が復活した新しい「経済システム」を意味しており、ここにおいて人間は、自らの「恣意」と「イニシアティブ」にもとづいて自由かつ創造的な（＝労働の目的を自己自身のうちに有した）経済活動を営むことが可能となる。恒木は、ゾンバルトの議論をこのように整理したうえで、さらにレハイスと同様、彼の民族観がナチス的な人種理論と対立することを指摘する。ゾンバルトが問題としたのは、近代的経済人に「事物化」をもたらす「ユダヤ的精神」であり、「ユダヤ人」そのものではなかった。ただし、農民や手工業

者の意義を強調し、「ユダヤ的精神」を非難するゾンバルトの論法は、ほかならぬナチスと「まったく同一」であり、「ドイツ社会主義」対「ユダヤ的精神」という単純な善悪二元論の構図は、いつでもナチスに回収される危険性を秘めていた。

恒木の論稿は『ドイツ社会主義』にかんするわが国で初めての本格的研究であり、ゾンバルトとナチスとの断絶・回収の両面を別扱したその功績は高く評価されなければならない。ただ一点惜しむらくは、ゾンバルトの資本主義批判を考察するうえで不可欠の著作『19世紀のドイツ国民経済』の検討をまったく欠いていることである。アッペル（Appel 1992, 48-49）やレンガー（Lenger 1994, 136-42）、あるいは田村（1997, 244注7; 248注22）が指摘するように、ゾンバルトの資本主義文化批判が特に強まるのは『19世紀のドイツ国民経済』以降のことであり、その意味で『ドイツ社会主義』の思想的淵源ともいえる本書の内在的分析があれば、その論証にはいっそうの厚みがくわえられたのではないかと思われる⁸⁾。

上記以外のわが国におけるこの時期のゾンバルト研究の成果として逸することができないのは、柳澤治と原田哲史の論稿である。まず柳澤（1998）は、第1次大戦以後のドイツにおける「資本主義の転換」にかんする論議でゾンバルトの晩期資本主義論が占めている位置の重要性に注目する。柳澤は1928年の社会政策学会でのゾンバルトの報告、特に資本主義の存続にかんするその悲観的な立場が、クリスティアン・エックハート、アルフレート・ヴェーバー、カール・ディールらの歴史学派の大勢から厳しい批判にさらされたこと、にもかかわらず「資本主義の新局面」としてのその「転換」の議論に大きな関心が集まったのは、ゾンバルトの問題提起に現今の資本主義が直面する「危機」に対する鋭い洞察が含まれていたからであると指摘する。くわえて、柳澤は、ゾンバルトの晩期資本主義

論の中核をなすアウトルキー化論が『資本主義の将来』でより深化されている事実に着目しつつ、「再農業化」へと結実するその政策の具体的内容とそれに対するオイレンブルクの批判にも論及している。さらに柳澤（2001）では、ゾンバルトの晩期資本主義論がヴァルター・ラーテナウの新経済体制論とともに向井鹿松や本位田祥男をはじめとする戦前日本の代表的な統制経済論に及ぼしたインパクトが考察されている。柳澤のゾンバルトに対する強い関心は、ドイツにおける「資本主義構造転化論争」を分析した論稿（柳澤 1982）以来のものであり、いまだドイツにおいてさえゾンバルト再評価の動きがなかった時期に彼の晩期資本主義論に意義を見出したその炯眼は敬服に値するといえよう。他方、原田（2011）は、理念型の方法によって「部分認識 Teilerkenntnis」へと傾斜したヴェーバーに対して、「総体認識 Gesamterkenntnis」を目指したゾンバルトの方法論的特徴を、同じ「最新歴史学派」に属するザリーンとシュピートホフへの影響・継承関係にも留意しながら検討している。その際、原田が注目するテキストは、『経済生活の秩序』第 2 版（1927b）である。原田によれば、「そこで扱われている中心問題は、「経済生活」を 3 層構造の「経済システム」として精査して描くことであり、さらにはヴァリエーションとしての様々な経済システムを比較し叙述すること」（原田 2011, 54）にある。「経済システム」をなす 3 層構造とは、(1) 経済心性または主観的精神、(2) 秩序または形態・組織、(3) 技術、であり、ゾンバルトはこの 3 要素のそれぞれをさらに細かな下位概念へと分類する。「ゾムバルトによれば、あらゆる個々の国民経済を独自の総体として把握するためには、それぞれの精神・組織・技術という 3 層をそれぞれ自体として、またそれらの相互作用も含めて研究する必要がある」（57）。この 3 層のうち特に重視されるのは「精神」であるが、しかし原田によれば、『経済生活の秩序』では各国民の文化・

精神について立ち入った叙述はなく、ゾンバルトがウエートを置くのは、「経済システム」のシェーマにおける複数の 2 項対立的な図式（たとえば、精神（経済心性）であれば「欲求充足原理」と「営利原理」、**「伝統主義」と「合理主義」**など）を総合的に構築し、各国民経済がそれぞれどちらの性質を有しているのかを規定することにあつた。つまり、各国民経済を 3 層構造のメルクマールで総体的に把握し、かつ 2 項対立のいずれに帰属するのかまでを確定することによって、地理的に異なる複数の国民経済同士の比較をより複眼的・構造的に行うことができるようになるというのである。原田には、ザリーンとシュピートホフの総体認識の方法である「直観的理論 anschauliche Theorie」を考察したすぐれた論稿（原田 2001）があるが、そこでも示唆されていた彼らに対するゾンバルトの方法論的影響は、本論文によってよりはっきりと示されたといつてよい。

IV 総括と展望

本稿では、1990 年代以降のドイツと日本におけるゾンバルト研究の動向を整理してきた。アップル、ブロッケ、レンガーの先駆的な研究とバックハウス編纂の論文集、さらにはそれ以降の竹林の業績は、従来のゾンバルト研究のあり方に反省と修正を迫り、新しい研究視角を導くうえでドイツのみならず日本の研究者たちにも大きな影響を与えたように思われる。「ドイツ歴史学派ルネサンス」と連動しつつ、ゾンバルト研究は 90 年代以降、間違いなく新しい段階に入った。

こうした観点からまず注目されるのは、特にアップルの研究以来、これまで等閑に付されてきた『近代資本主義』初版の重要性が、再考されたことである。理論と歴史との統合、「指導的経済主体」としての企業家像、「企業」と「経営」の峻別、手工業と資本主義の概念的区別、地代蓄積説、「資本主義的精神」の生成、都市

形成論、「奢侈」論、などに代表される初版の議論は、ゾンバルト自身の研究の基礎を形作っただけではなく、ヴェーバー、シュンペーターをはじめとする同時代の多くの知性たちにも重大な影響を及ぼしていたことが今日では周知の事実となった。かつてのように第2版をゾンバルトの著者とみなし、初版を無視することはもはや許されなくなっている。このことは同時に、ゾンバルトを「資本主義起源論争」の敗北者としてのみ評価するというこれまでの見方にも一定の修正を迫ることになる。

従来の評価の「修正」は、「マルクシストとしてのゾンバルト」あるいは「ナチスのイデオログとしてのゾンバルト」という見方にも妥当する。こうしたゾンバルトに対する評価は、「転向」問題にも密接に関連するが、前者についていえば、青年期のゾンバルトが傾倒したのはマルクスではなくラサールであるというレハイスの指摘があり、たしかに資本主義経済の分析手法をマルクスから多く負うていたとしても、それをもってゾンバルトを「唯物史観の信奉者」とまでみなすのは、「誇張された表現」ないし「事柄の真相を隠蔽する解釈」（田村1997, 242）であるという見方が国内外で定着しつつある。また、後者についても、ゾンバルト晩年の経済思想とナチスの経済政策には、大きな隔たりがあることは事実であり、だからこそ『ドイツ社会主義』は、ナチスによって「あらまし拒絶された」（Lenger 1994, 374）のである。近年の研究に照らしてみても、ゾンバルトとナチスとの親近性のみを強調する解釈はもはや成立しえないことが理解されよう。

以上見てきたように、原テキストの内在的分析が本格化するにつれて、ゾンバルトの近代資本主義研究の意義が様々な観点から見直されるようになり、それとともにこれまで否定的に論じられることが多かったゾンバルトの資本主義文化批判も昨今ではその「アクチュアルな内容」（Peukert 2000, 68-69）が再評価されている。そ

うした潮流に掉さず最新の研究が、田村信一の論稿「資本主義とエコロジー—ゾンバルトの近代資本主義論」（田村2012）である。この論稿で田村は、ゾンバルトが「完全に解き放たれた資本主義の力」から社会と国民の共有財産である風景を守るためにヴェーバーとともに景観保護の実践的活動に携わっていた事実（1904年）を指摘する。この事実それ自体がきわめて興味深い、しかし注目すべきはゾンバルトをしてかかる活動に関わらせた思想である。『近代資本主義』初版で資本主義の発展によって個人が故郷のしがらみから解放され、都市に大量流入して高賃金を背景に自由な消費主体となる社会（＝「大衆消費社会」）の出現を説いたゾンバルトは、そこにおいて流行に敏感で消費財を簡単に使い捨てる「非情」な消費感覚をもつ「新人類」が登場したことに注意を喚起する。翌年の『19世紀のドイツ国民経済』では、この「欲望の奴隷」たる「新人類」の精神的荒廃が浮き彫りにされるとともに、資本主義的な「事象化」ないし「平準化」が人間と自然に対する物質の優位を促進させ、かつ文化の地域的独自性の喪失に拍車をかけたことが強調される。ゾンバルトは資本主義の帰結として出来た以上の特徴を「アスファルト文化」という言葉で表現し、現状を強く危惧した。彼の環境保護運動への積極的な関わりは、かかる深刻な認識と不可分であったのである。ただし、田村によれば、この段階でのゾンバルトには「物質文化」批判と資本主義の前進論に混在が見られる。ゾンバルトが、環境保護の観点から近代技術批判を強めるのは『近代資本主義』第2版以降のことであり、特に『ドイツ社会主義』にいたって「前資本主義経済システム」（農業・手工業）の再評価と国家による「技術のコントロール」が強く主張された。田村は、ゾンバルトが一時的とはいえヒトラーとナチスを支持したのは、アウトラーの実現、近代技術のコントロール、環境保護、の立場からまさに強力な国家と指導者を待

望したからにはほかならないと指摘している。その意味で、ゾンバルトの歩みは「ドイツのエコロジー運動の先駆者がたどった苦渋の道象徴的に示すもの」(田村 2012, 120)であった。

田村の論稿はゾンバルトの近代資本主義論をエコロジーの観点から再考した新しい試みとして評価できるが、こうしたアプローチの仕方は、ゾンバルトの経済思想の新生面を開くことに貢献するばかりか、その思想がもつ現代性を改めて気づかせるうえでも有益である。今後、ゾンバルトの近代資本主義論に内包された「アクチュアルな内容」をさらに究明しようとする試みが続くことが期待されるが⁵⁹⁾、それにくわえてもう1つ研究の進展をはかるうえで重要な課題となるのは、ゾンバルトと同時代知識人たちとの学問的影響関係を具体的に論証することである。この点にかんして、ヴェーバーとの関係についてはすでに一定の研究蓄積があり、近年ではマルクス、シュモラー、シュンペーターあるいはザリーンやシュピートホフとの影響関係の解明に注目が集まっている。しかし、テンニース、ジンメル、シェーラー、あるいはヴェブレンをはじめとするアメリカ制度学派との学問的影響関係については、その重要性がしばしば指摘はされるものの、研究は手薄で本格的な検討はまだこれからである。ゾンバルトの経済思想の内実さらに踏み込むためにもこうした同時代知識人との影響関係を確定する作業は、今後必要不可欠と思われる。

奥山 誠：明治大学政治経済学部

注

1) ユルゲン・バックハウスを中心に1988年ハイルブルンで開催されたシュモラー生誕150周年シンポジウムは、ドイツ歴史学派再評価の大きなきっかけとなった。その主要な成果は、Backhaus (1993)に収められている。また、シンポジウム以降のシュモラーに対する急速な関心の増大(=「シュモラー・ルネサンス」)とその重

厚な研究蓄積にかんしては、Peukert (2001)が参考になる。ポイカート以降のドイツおよび日本を含めたシュモラー研究の状況ならびに彼の経済社会学を論じたものとしては、田村 (2006)がある。わが国で歴史学派経済学、わけてもシュモラーを見直す契機となった業績としては、塩野谷 (1990)あるいは特に田村 (1993)が重要であるが、それ以降の研究書としては、住谷・八木編 (1998)が注目される。歴史学派を含めたドイツ語圏の経済思想を扱ったものとしては、八木編 (2006)と田村・原田編著 (2009)が近年の代表的な成果である。後者については、本誌52巻1号に掲載された柳澤 (2010)の書評も参照。なお、歴史学派について考察した英文の業績としては、Shionoya (ed. 2001)がある。

- 2) ブロツケ編纂のこの著作は、本稿の対象とする時期以前に刊行されたものであるが、その後のゾンバルト研究の進展にきわめて重要な貢献を果たした。本書には、ゾンバルトの『近代資本主義』初版に対するナウマンやシュモラー、ヒルファディングの書評、第2版に対するザリーン、シュンペーターおよびパーソンズやヒンツェの書評が収録されており、またゾンバルト晩年の回想録(1933)も収められていて、資料集としても便利である。
- 3) Ikeda (2008, 88)は、本論集所収のゾンバルトの経済学・経済思想を扱った各論文が注目する研究テーマを、1. ゾンバルトの動態的経済学、2. 企業家精神の概念、3. 資本主義の歴史的分析、4. 農業の重要性、の4つに分類している。
- 4) Takebayashi (2003)については、本誌第45号掲載の田村 (2003)の書評も参照。
- 5) 収録されている論文は、Sombart (1897; 1902c; 1904; 1908; 1909; 1911b; 1925; 1929b)、著作は、Sombart (1927b; 1932)である。
- 6) ドイツ本国の重厚な成果にくわえて1990年代半ば以降のわが国におけるゾンバルト研究の進展に大きく貢献したのは、金森誠也の訳業である。金森は、1969年に自ら翻訳した『奢侈と資本主義』(Sombart 1913a)を一部訳語の手直しをしたうえで1987年に再刊したことを皮切りに、1990年に『ブルジョワ近代経済人の精神史』

(Sombart 1913c), 1994年に『ユダヤ人と経済生活』(Sombart 1911a), そして1996年には『戦争と資本主義』(Sombart 1913b)を相継いで翻訳・刊行した。つまり、金森は、ゾンバルトが『近代資本主義』改訂の「準備作業」として執筆した4冊のモノグラフのすべてを訳出したわけである。これにより、ゾンバルトの1910年代の経済思想に接近しやすくなったばかりでなく、ゾンバルトとヴェーバーとの「資本主義起源論争」の推移をかなりの程度日本語で追うことができるようになった。この意味で、金森の訳業が果たした功績はきわめて大きいものがある。なお、明治末葉以降大正を経て第2次大戦にいたるまでゾンバルトの著作および論文はきわめて精力的に翻訳され続けた。少なくとも戦前まではヴェーバーを圧倒する翻訳書とそれにもとづく研究蓄積をわが国のゾンバルト研究は有していたといつてよい。これについて詳しくは、奥山(2010)を参照されたい。

- 7) 本書の概要については、竹林の書評(2004)も参照。
- 8) 恒木はその後、ゾンバルトの有価証券観に法学の影響があることを指摘した論稿(恒木2012)を発表しているが、そこでは『19世紀のドイツ国民経済』も参照されており、資本主義文化批判に関連する論旨をもった文脈(Sombart 1903, 219)からの引用(14)もなされている。
- 9) 先に掲げた筆者による一連の研究でもゾンバルト経済学のもつ現代性と現実性が意識されていることを付言しておきたい。奥山(2005; 2006; 2009)でも指摘したように、ゾンバルトの問題関心は「近代資本主義の歴史的起源」の解明だけに向けられていたのではない。「現代の」・「現実の」資本主義経済における「最新の局面」(=「盛期資本主義」, およびそこからの移行としての「晩期資本主義」)の分析にもゾンバルトはきわめて強い関心を抱いていたのである。そのことは、たとえば同時代の「盛期資本主義」を牽引する「指導的経済主体」としての企業家像を彫琢するにあたって彼がジークムント・ラッサールといたった当代屈指の企業家たちに範を求めていることにも窺うことができるし、くわえてそこで示され

た理想的な企業家の姿は、シュンペーターのそれとの継承性という学説史的な問題圏を超えて、それ自体が今日なお顧みるに値する「アクチュアルな内容」を備えているといい得るのである。停滞と混迷を極めた、それゆえにいよいよ個々の経済主体、および組織も含めたイノベーションの重要性が改めて強調されつつある昨今の経済社会の状況を鑑みると、企業家論を基軸とするゾンバルトの資本主義理論は、古びどころかその有効性をますます増しているようにさえ思われる。この点については、Okuyama(2007)も参照。なお、第1次大戦以降の資本主義の転換・衰退(「盛期」から「晩期」への移行)にかんするゾンバルトの議論では、企業家機能の変容の問題が重要なトピックとして浮上する。シュンペーターの問題意識とも密接に関連するゾンバルトの晩期資本主義論にかんしては、これまでの研究成果を踏まえつつ、筆者なりの視角から今後扱う予定である。

参考文献

- Appel, M. 1992. *Werner Sombart: Historiker und Theoretiker des modernen Kapitalismus*. Marburg: Metropolis.
- Backhaus, J., hrsg. 1993. *Gustav von Schmoller und die Probleme von heute*. Berlin: Duncker und Humblot.
- , ed. 1996a. *Werner Sombart (1863–1941): Social Scientist*. Vol. I: *His Life and Work*. Marburg: Metropolis.
- , ed. 1996b. *Werner Sombart (1863–1941): Social Scientist*. Vol. II: *His Theoretical Approach Reconsidered*. Marburg: Metropolis.
- , ed. 1996c. *Werner Sombart (1863–1941): Social Scientist*. Vol. III: *Then and Now*. Marburg: Metropolis.
- . 1996d. Participants of Sombart's Seminar. In Backhaus (1996a): 115–29.
- , hrsg. 2000. *Werner Sombart (1863–1941): Klassiker der Sozialwissenschaften*. Marburg: Metropolis.
- Betz, H. K. 1996a. Werner Sombart's Theory of the City. In Backhaus (1996b): 233–50.
- . 1996b. Werner Sombart and German Romanticism. In Backhaus (1996c): 111–31.

- . 2000. Sombarts Theorie der Stadt. In Backhaus (2000): 221–37.
- Brocke, B. v. 1972. Werner Sombart. In *Deutsche Historiker* Bd. 5, hrsg. von H.-U. Wehler. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht: 130–48. 川本和良訳「ヴェルナー・ゾンバルト」ドイツ現代史研究会訳『ドイツの歴史家』第3巻, 未来社, 1983.
- , hrsg. 1987 a. *Sombarts ‚Moderner Kapitalismus‘: Materialien zur Kritik und Rezeption*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- . 1987 b. Werner Sombart 1863–1941. Eine Einführung in Leben, Werk und Wirkung. In Brocke (1987 a): 11–65.
- . 1992. Werner Sombart 1863–1941: Capitalism—Socialism—His Life, Works and Influence Since Fifty Years. *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte* 1:113–82.
- . 1996. Werner Sombart 1863–1941: Capitalism—Socialism—His Life, Works and Influence. Backhaus (1996 a): 19–102.
- Chaloupek, G. 1995. Long-term Economic Perspectives Compared: Joseph Schumpeter and Werner Sombart. *European Journal of the History of Economic Thought* 2 (1): 127–49.
- . 1996. Long Term Economic Trends in the Light of Werner Sombart’s Concept of »Spätkapitalismus.« In Backhaus (1996 b): 163–78.
- Drechsler, W. 2000. Zu Werner Sombarts Theorie der Soziologie und zur Betrachtung seiner Biographie. In Backhaus (2000): 83–100.
- Ebner, A. 2002. Nationalökonomie als Kapitalismustheorie: Sombarts Theorie kapitalistischer Entwicklung. In Ebner, A. and H. Peukert (2002): 7–23.
- Ebner, A. and H. Peukert, hrsg. 2002. *Werner Sombart: Nationalökonomie als Kapitalismustheorie. Ausgewählte Schriften*. Marburg: Metropolis.
- Glombowski, J. 1996. Werner Sombart’s Why is there no Socialism in the United States? Revisited. In Backhaus (1996 b): 275–99.
- Hagemann, H. and M. Landesmann. 1996. Sombart and Dynamics. In Backhaus (1996 b): 179–204.
- Ikeda, Y. 2008. The German Historical School: Toward the Integration of the Social Sciences. 『経済学史研究』 (*History of Economic Thought*) 50 (1): 79–95.
- Kurer, O. 2000. Die Rolle des Staates für die wirtschaftliche Entwicklung. In Backhaus (2000): 151–67.
- Lenger, F. 1994. *Werner Sombart 1863–1941: Eine Biographie*. München: C. H. Beck.
- . 1996. Marx, the Crafts, and the First Edition of Modern Capitalism. In Backhaus (1996 b): 251–73.
- . 2000. Marx, das Handwerk und die erste Auflage des Modernen Kapitalismus. In Backhaus (2000): 169–97.
- . 2009. *Sozialwissenschaft um 1900: Studien zu Werner Sombart und einigen seiner Zeitgenossen*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Lindenlaub, D. 1967. *Richtungskämpfe im Verein für Sozialpolitik: Wissenschaft und Sozialpolitik im Kaiserreich vornehmlich vom Beginn des „neuen Kurses“ bis zum Ausbruch des ersten Weltkrieges [1890–1914]*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Ludwig, H. 1996. Sombart and the Jews. In Backhaus (1996 a): 205–10.
- Marcus, J. 1996. Werner Sombart’s Influence on German Literature: The Case of Thomas Mann. In Backhaus (1996 c): 133–46.
- Müller, F. 1996. I Remember Sombart. In Backhaus (1996 a): 103–13.
- Okuyama, M. 2007. Die Auffassung des kapitalistischen Unternehmers von Werner Sombart und seine Kredittheorie. 明治大学大学院『経済学研究論集』 (*Journal of Economics. Meiji University Graduate School*) 27:1–18.
- Passow, R. 1918. *Kapitalismus: Eine begrifflich-terminologische Studie*. Jena: Gustav Fischer.
- Peukert, H. 2000. Werner Sombart. In Backhaus (2000): 15–82.
- . 2001. The Schmoller Renaissance. *History of Political Economy* 33 (1): 71–116.
- . 2002. Werner Sombart: ein werkbiographischer Überblick. In A. Ebner und H. Peukert (2002): 25–36.
- Priddat, B. P. 1996. Werner Sombart’s Late Economic Thinking: Back to Physiocracy? In Backhaus (1996 a): 271–96.
- Prisching, M. 1996. The Entrepreneur and his Capitalist Spirit: Sombart’s Psycho-Historical Model. In Backhaus (1996 b): 301–30.
- . 2000. Unternehmer und kapitalistischer Geist: Sombarts psycho-historische Studie. In Backhaus

- (2000): 101-49.
- Reheis, F. 1996. Return to the Grace of God. Werner Sombart's Compromise with National Socialism. In Backhaus (1996a): 173-91.
- . 2000. Zurück zum Gottesgnadentum. Werner Sombarts Kompromiß mit dem Nationalsozialismus. In Backhaus (2000): 239-58.
- Rieß, R. 1996. Werner Sombart under National Socialism: A first Approximation. In Backhaus (1996a): 193-204.
- Scaff, L. A. 1996. Sombart's Politics. In Backhaus (1996a): 151-72.
- Schmidt, K. 1996. Sombart on Population. In Backhaus (1996b): 13-29.
- . 2000. Sombarts Bevölkerungstheorie. In Backhaus (2000): 199-219.
- Schumpeter, J. A. 1908. *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*. Leipzig: Duncker und Humblot. 大野忠男他訳『理論経済学の本質と主要内容』岩波文庫, 1983.
- Seifert, E. K. 1996. Sombart's New Outline of Scope and Method of Economics. »Methodologie oder Verfahrenslehre der Neuen Nationalökonomie« Facing the Transition of the »Wirtschaftssystem« to Late-Capitalism Since World War I. Backhaus (1996a): 241-69.
- Senn, P. R. 1996. Sombart's Reception in the English-Speaking World. In Backhaus (1996c): 147-286.
- Shionoya, Y., ed. 2001. *The German Historical School: The Historical and Ethical Approach to Economics*. London: Routledge.
- Sombart, W. 1888. *Die römische Campagna: Eine sozialökonomische Studie (=Staats- und sozialwissenschaftliche Forschungen, hrsg. von G. Schmoller, Bd. 8. H. 3)*. Leipzig: Duncker und Humblot.
- . 1891. Die Hausindustrie in Deutschland. *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik* 4:103-56.
- . 1892. Hausindustrie (Art.). In *Handwörterbuch der Staatwissenschaften*. 1. Aufl. Bd. 4:418-41.
- . 1893. Zur neuen Literatur über Hausindustrie. *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik* 61:736-81; 894-936.
- . 1894. Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx. *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik* 7:555-94. 知念英行訳「カール・マルクスの経済学体系」知念編訳『マルクスと社会科学』所収, 新評論, 1976.
- . 1896. *Sozialismus und soziale Bewegung im 19. Jahrhundert*. Jena: Gustav Fischer.
- . 1897. Ideale der Sozialpolitik. *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik* 10:1-48.
- . 1902a. *Der moderne Kapitalismus*. 1. Aufl. Bd. 1: *Die Genesis des Kapitalismus*. Leipzig: Duncker und Humblot.
- . 1902b. *Der moderne Kapitalismus*. 1. Aufl. Bd. 2: *Die Theorie der kapitalistischen Entwicklung*. Leipzig: Duncker und Humblot.
- . 1902c. Der Stil des modernen Wirtschaftslebens. *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik* 17:1-20.
- . 1903. *Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert*. Berlin: Georg Bondi.
- . 1904. Versuch einer Systematik der Wirtschaftskrisen. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 19:1-21.
- . 1908. Karl Marx und die soziale Wissenschaft. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 26:429-50.
- . 1909. Der kapitalistische Unternehmer. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 29:689-758.
- . 1911a. *Die Juden und das Wirtschaftsleben*. München und Leipzig: Duncker und Humblot. 長野敏一抄訳『ユダヤ人と資本主義』国際日本協会, 1943. 金森誠也監訳, 安藤勉訳『ユダヤ人と経済生活』荒地出版社, 1994.
- . 1911b. Technik und Kultur. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 33:305-47.
- . 1913a. *Luxus und Kapitalismus (Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus, Bd. 1)*. München und Leipzig: Duncker und Humblot. 田中九一訳『奢侈と資本主義』而立社, 1925. 金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』至誠堂, 1969. 論創社, 1987. 講談社学術文庫, 2000.
- . 1913b. *Krieg und Kapitalismus (Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus, Bd. 2)*. München und Leipzig: Duncker und Humblot. 立野保男抄訳『戦争と資本主義』大同書院, 1938. 金森誠也訳『戦争と資本主義』論創社, 1996.
- . 1913c. *Der Bourgeois: Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*. München und Leipzig: Duncker und Humblot. 金森誠也訳『ブ

- ルジョワ—近代経済人の精神史』中央公論社, 1990.
- . 1915. *Händler und Helden: Patriotische Besinnungen*. München: Duncker und Humblot.
- . [1916] 1987 a. *Der moderne Kapitalismus: Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart*. Bd. 1: *Einleitung—Die vorkapitalistische Wirtschaft—Die historischen Grundlagen des modernen Kapitalismus*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. 岡崎次郎抄訳『近世資本主義』第1巻, 2冊, 生活社, 1942-1943.
- . [1916] 1987 b. *Der moderne Kapitalismus: Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart*. Bd. 2: *Das europäische Wirtschaftsleben im Zeitalter des Frühkapitalismus, vornehmlich im 16., 17. und 18. Jahrhundert*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- . 1925. Die prinzipielle Eigenart des modernen Kapitalismus. In *Grundriss der Sozialökonomik*. IV. Abteilung: *Spezifische Elemente der modernen kapitalistischen Wirtschaft*. I. Teil. Tübingen: J. C. B. Mohr: 1-26.
- . 1927 a. *Der moderne Kapitalismus: Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart*. Bd. 3. *Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus*. München: Duncker und Humblot. 梶山力抄訳『高度資本主義 I』有斐閣, 1940.
- . 1927 b. *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*. 2. Aufl. Berlin: Julius Springer.
- . 1929 a. Die Wandlungen des Kapitalismus. In *Verhandlungen des Vereins für Sozialpolitik in Zürich 13. bis 15. September 1928*. München und Leipzig: Duncker und Humblot: 23-41.
- . 1929 b. Nationalökonomie. *Weltwirtschaftliches Archiv* 30:1-18.
- . 1930. *Die drei Nationalökonomien: Geschichte und System der Lehre von der Wirtschaft*. 2. Aufl. Berlin: Duncker und Humblot. 小島昌太郎監訳『三つの経済学』雄風館書房, 1933.
- . 1932. *Die Zukunft des Kapitalismus*. Berlin: Buchholz und Weißwange. 新川傳介訳「資本主義の将来」(一)-(三)『長崎商高 研究館彙報』20 (3); 20 (4); 21 (1), 1932-1933. 鈴木晃抄訳「資本主義の将来」『世界大思想全集 86』所収, 春秋社, 1933.
- . 1933. Mein Leben und Werk. In Brocke (1987 a): 428-34.
- . 1934. *Deutscher Sozialismus*. Charlottenburg: Buchholz & Weisswange. 難波田春夫訳『独逸社会主義』三省堂, 1936.
- . 1938. *Vom Menschen: Versuch einer geisteswissenschaftlichen Anthropologie*. Berlin: Buchholz & Weisswange.
- Takebayashi, S. 2003. *Die Entstehung der Kapitalismustheorie in der Gründungsphase der deutschen Soziologie: Von der historischen Nationalökonomie zur historischen Soziologie Werner Sombarts und Max Webers*. Berlin: Duncker und Humblot.
- Tamura, S. 2001. Gustav von Schmoller and Werner Sombart: A Contrast in the Historico-ethical Method and Social Policy. In Shionoya (2001): 105-19.
- Tötto, P. 1996. In Search of the U-turn: A Critique of Dieter Lindenlaub's Interpretation of Werner Sombart's Methodological Development. In Backhaus (1996 a): 227-39.
- Weber, M. 1904-1905. Die protestantische Ethik und der „Geist“ des Kapitalismus. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 20; 21: 1-54; 1-110. 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』未来社, 1994.
- . 1920. Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus. In *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*. Tübingen: J. C. B. Mohr: 17-206.
- Wright, H. R. C. 1996. Sombart and War. In Backhaus (1996 a): 211-25.
- Zweynert, J. und D. Riniker. 2004. *Werner Sombart in Rußland: Ein vergessenes Kapitel seiner Lebens- und Wirkungsgeschichte*. Marburg: Metropolis.
- 奥山 誠. 2005. 「ヴェルナー・ゾンバルトの企業家論」『経済学史研究』47 (1): 35-48.
- . 2006. 「ゾンバルトにおける資本主義的企業家像の構成と「ユダヤ人的特性」」明治大学『政経論叢』75 (1・2): 225-62.
- . 2008 a. 「ヴェルナー・ゾンバルトと信用創造理論の系譜—「動態的信用理論」の受容をめぐって」明治大学大学院『経済学研究論集』28: 1-21.
- . 2008 b. 「ヴェルナー・ゾンバルトの株式会社論—民主的資本調達システムの成立と経営者支配の論理」明治大学大学院『経済学研究論集』

- 29:15-36.
- . 2009. 『ヴェルナー・ゾンバルトの企業家観と信用・株式会社論—「盛期資本主義経済」の認識を中心として』 明治大学大学院政治経済学研究科博士学位請求論文.
- . 2010. 「日本におけるゾンバルト経済思想の受容過程—明治期から戦中まで」 明治大学『政経論叢』 78 (5・6): 243-311.
- . 2011. 「明治期日本におけるゾンバルト受容の一断面—福田徳三の『近代資本主義』初版の導入を中心に」 金子光男編著『ウエスタン・インパクト—近代社会経済思想の比較史』 所収, 東京堂出版: 177-201.
- 塩野谷祐一. 1990. 「グスタフ・フォン・シュモラー—ドイツ歴史派経済学の現代性」 『一橋論叢』 103 (4): 399-419.
- 住谷一彦・八木紀一郎編. 1998. 『歴史学派の世界』 日本経済評論社.
- 竹林史郎. 2004. 「書評: 牧野 (2003)」 『社会経済史学』 70 (4): 502-03.
- 田村信一. 1993. 『グスタフ・シュモラー研究』 御茶の水書房.
- . 1996. 「近代資本主義論の生成 (一)—ゾンバルト『近代資本主義』 (初版 1902) の意義について」 北星学園大学経済学部『北星論集』 33:1-33.
- . 1997. 「近代資本主義論の生成 (二)—ゾンバルト『近代資本主義』 (初版 1902) の意義について」 北星学園大学経済学部『北星論集』 34:217-51.
- . 1998. 「国民経済から資本主義へ—ロッシヤ、シュモラー、ゾンバルト」 住谷・八木編 (1998): 55-75.
- . 2003. 「書評: Takebayashi 2003」 『経済学史学会年報』 45:122-24.
- . 2006. 「G. v. シュモラー—社会問題から経済社会学へ」 八木編 (2006): 63-111.
- . 2009. 「歴史学派」 田村・原田編著 (2009): 101-39.
- . 2012. 「資本主義とエコロジー—ゾンバルトの近代資本主義論」 『古典から読み解く経済思想史』 所収, 経済学史学会編, ミネルヴァ書房: 105-23.
- 田村信一・原田哲史編著. 2009. 『ドイツ経済思想史』 八千代出版.
- 恒木健太郎. 2010. 「ヴェルナー・ゾンバルトの保守革命—「資本主義的精神」と「ドイツ社会主義」の精神」 『ドイツ保守革命—ホフマンスタール/トーマス・マン/ハイデッガー/ゾンバルトの場合』 所収, 青地伯水編, 松籟社: 179-250.
- . 2012. 「ドイツ社会学史における法学の影響—有価証券をめぐる論争を例に」 『ジメル研究会会報』 17:12-23.
- 原田哲史. 2001. 「歴史学派の遺産とその継承—ザリーンとシュピートホフの「直観的理論」」 『思想』 921:145-70.
- . 2011. 「ヴェルナー・ゾムバルトにおける「経済システム」と発展—『経済生活の秩序』における「文化領域」としての経済」 関西学院大学『経済学論究』 64 (4): 45-65.
- 牧野雅彦. 2003. 『歴史主義の再建—ウェーバーにおける歴史と社会科学』 日本評論社.
- 村上宏昭. 2003. 「「ネガティブ・パラダイム」としての W. ゾンバルト—社会科学と人種理論」 『関西大学西洋史論叢』 6:1-18.
- . 2004. 「近代ドイツにおける歴史科学の位相—ヴェーバーの「価値関係」とゾンバルトの「価値内在」」 関西大学史学・地理学会『史泉』 99:1-19.
- . 2006a. 「「ユダヤ人」表象の変貌—マルクス・ヴェーバー・ゾンバルト」 関西大学史学・地理学会『史泉』 103:1-16.
- . 2006b. 「「近代資本主義」概念の確立—マルクスからゾンバルトへ」 『関学西洋史論集』 29:39-50.
- . 2009. 「教養人, この非政治的なるもの—ドイツ教養理念と第一次世界大戦」 『ゲシヒテ』 2:61-74.
- 八木紀一郎編. 2006. 『経済思想のドイツ的伝統』 (『経済思想』 第7巻) 日本経済評論社.
- 柳澤 治. 1982. 「資本主義構造転化論争—一九二〇年代社会政策学会を中心に」 『現代国家の歴史的源流』 所収, 岡田与好編, 東京大学出版会: 169-96.
- . 1998. 「第一次大戦後における歴史派経済学と政策論—F・リスト協会・社会政策学会を中心に」 住谷・八木編 (1998): 221-52.
- . 2001. 「戦前日本の統制経済論とドイツ経済思想—資本主義の転化・修正をめぐる」 『思想』 921:120-44.
- . 2010. 「書評: 田村・原田編 (2009)」 『経済学史研究』 52 (1): 112-13.

Economic Thought of Werner Sombart: A Survey of the Past Twenty Years

Makoto Okuyama

The purpose of this paper is to survey German and Japanese studies of Werner Sombart's thought during the past 20 years. The Heilbronn Conference in 1991, organized by Jürgen Backhaus, led to a Sombart revival that followed "a renaissance of the German Historical School" in the 1980s. Many scholars were encouraged to reconsider the contributions of Sombart to the development of German economics.

Section I of this paper offers an explanation of why an energetic rediscovery of Sombart has occurred in the past 20 years. Section II proffers commentary on three excellent books and articles on Sombart published in Germany (Appel 1992; Brocke 1992; Lenger 1994). These three works deserve to be discussed in detail because they provide fresh insights into Sombart's life, academic achievements, and his influence on contemporaries as well as later generations. In addition, the three volumes edited by Backhaus (1996a; 1996b; 1996c) that summarize the re-

sults of the Heilbronn conference are noted, along with the work of Takebayashi (2003), which is one of the most valuable studies focusing on Sombart and Weber during the past decade. Section III considers recent publications on Sombart in Japan. Since the late 1990s, Japanese Sombart studies concerning the history of economic thought have been on the rise, perhaps inspired by the outstanding studies in Germany that occurred nearly a decade earlier. Tamura (1996; 1997; 1998), Yanagisawa (1998; 2001), Makino (2003), and a few emerging scholars will be reviewed here. In this section, the relative novelty of recent Japanese studies on Sombart is elucidated in comparison with that of recent German scholarship. Section IV provides suggestions as to what subjects may merit further exploration in the future.

JEL classification numbers: B 15, B 21, B 31.